

＜観光のまなざし＞が向けられる＜ダークな記憶装置＞  
 としての日本統治期の建造物と旧「眷村」  
 ——台湾のツーリズムスケープ瞥見（1）——

Structures in the Japanese Colonial Period and the Former ‘Military Villages’  
 as the “Dark-Memory Stores” Becoming the Objects of “the Tourist Gaze”:  
 A Glimpse of “*Tourismscape*” in Taiwan (1)

藤巻 正己\*

要 旨

今日、台湾では歴史的建造物を「古蹟」あるいは「文化資産」として保存し、台湾の歴史を振り返る＜記憶装置＞としたり、長年放置されていた工場施設などを「文化創意区」などにリノベーションして、新たな文化活動の拠点あるいは観光集客装置に利活用したりする取り組みが活発になされている。それらの多くには、50年間にわたる日本による植民地支配の痕跡を残す数多くの歴史的建築物や施設が含まれている。また、1949年に国共内戦で共産党軍に敗れ、中華民国政府とともに台湾に敗走してきた数十万人にも及ぶ国軍兵士とその家族など外省人たちの居留地となった「眷村」の歴史性と固有の文化（眷村文化）も、保存されるべき「文化資産」として認定され、＜観光のまなざし＞すら向けられるようになった。

本来ならば、日本時代の建造物は「植民地」支配という＜ダークな記憶＞を想起させ、＜負の歴史＞を伝える遺物にほかならない。また「眷村」は、日本に代わって台湾の「再植民地」支配を断行した国民党政権に連なる外省

\* 立命館大学文学部特任教授

人の居留地であったため、日本統治期以前から台湾を本籍としてきた本省人から忌避され、疎外されてきた存在であった。しかし、1990年代後半以降、とりわけ2000年代に入ってから、本省人にとって過去の〈ダークネス〉を想起させるはずの遺物・施設・場所が、単に〈負の遺産〉としてだけではなく、むしろ台湾が経験してきた歴史を振り返る〈記憶装置〉として、また、台湾文化固有の優れた多様性を表象する「古蹟」あるいは「文化資産」として〈包容〉されつつある。と同時にそれらは、台湾社会の活性化のため、あるいは観光・集客資源としても利活用されようとしている。

本稿は、台湾の〈ツーリズムスケープ〉 (*tourismscape*: 観光の現場の風景) の読み解きを通して、そうした動きの背景には、1980年代半ば以降の政治の民主化、〈台湾本土化〉意識 (〈台湾人アイデンティティ〉) の興隆とともに、マルチエスニック社会を統合すべく、省籍・族群・出身地の違いを乗り越えた〈新台湾人意識〉を強固にすることを企図した台湾政府による〈多文化主義〉政策が関わっていることを論ずるものである。

### Abstract

Today, in Taiwan, historical structures are preserved as “historical monuments” or “cultural assets” that are made into “memory stores” for the purpose of looking back on Taiwanese history. Factories that have long been abandoned are renovated and recreated into “Cultural and Creative Parks” and other similar facilities; in this way, the sites are actively utilized as centers of new cultural activities or as tourist attractions. Many of these sites include historical buildings and facilities where there remain traces of the fifty years of Japanese rule experienced by Taiwan.

After losing the Chinese Civil War in 1949, the government of the Republic of China joined the people who moved to Taiwan from the continent after WWII. The Republic of China Armed Forces troops and their families who fled the

continent settled in these “military villages,” alongside Taiwanese whose ancestors had lived in Taiwan before KMT related immigration wave there. These so-called “military villages” had remained invisible, but are gradually now coming to be “cultural assets” and objects of “the tourist gaze”.

In Taiwan, structures dating from the period of Japanese occupation would normally be considered a “negative heritage,” as they are a reminder of colonial rule. “military villages” are the settlements of the immigrants who moved to Taiwan from the continent after WWII, and who were connected to the KMT government that took decisive action to control the “re-colonization” of Taiwan in place of the Japanese. Thus, these immigrants had be averted to and lived separate from the people whose ancestors had lived in Taiwan before the KMT-related immigration wave. However, since the latter half of the 1990s, and particularly after the year 2000, the relics, facilities, and settlements that should have been reminders of the “darkness” from the point of view of the Taiwanese began to be seen as “tolerable” since they represented the formation of highly-developed diversity in Taiwanese culture, as well as opportunities to look back upon the history of Taiwan.

In this paper, I will discuss the “multiculturalism” that has been promoted by the Taiwanese government in order to create and strengthen “Taiwanese identity” as a concept that may serve the purpose of reunifying its multi-ethnic society, while democratization that started in the 1980s and simultaneously raising awareness of the Taiwanese “indigenization” after 1990s. I will approach this discussion through an analytical reading of the Taiwanese “*tourismscape*.”

キーワード：記憶装置、日本統治期、眷村、ダークネス、本土化、族群意識、  
新台湾人意識、多文化主義、台湾

**Key words** : the memory stores, the Japanese Colonial Period, military villages, darkness, indigenization, ethnic identity, new Taiwanese identity, multi-culturalism, Taiwan

## I はじめに

筆者は、1997 年来、その時々に関心や研究テーマに導かれ、台湾を訪れてきた。この小論では、そうした旅の経験で得られた知見をふまえつつ（表層観察のレベルにすぎないかもしれないが）、〈観光の現場の風景〉（ツーリズムスケープ）に垣間見られる台湾の政治社会的状況、あるいは〈ダークネス〉をはらむ〈場所の悲哀〉を包容しながら、〈台湾本土化〉の姿勢をよりいっそう強めつつある台湾社会の現状について考察を加えるものである。

ところで、台湾の政治社会的状況を考えるうえで、台湾に到来（入台）してきた時期や出身地・言語の差異によって、台湾に生きる人々が「四大族群」（族群＝エスニック集団）に分節されるとともに、大陸中国とは別の歴史を経験してきた台湾という〈本土〉において共生する多民族社会であることを念頭に置いておかねばならない。すなわち、一口に「台湾人」と呼ばれる人々も、まず、アジア太平洋戦争に敗れ日本の植民地支配が終焉を迎えた 1945 年までに台湾で生まれ、暮らしてきた台湾を本籍とする〈本省人〉と、日本に代わって中華民国政府が台湾を統治することになってから中国大陆から台湾に移り住んできた〈外省人〉とに分けられる。そして本省人は、日本統治期には「高砂族」と総称されたオーストロネシア系の原住民族と、17 世紀以降、明代・清代に大陸から入植してきた漢族とに区分される。さらに漢族は、福建系（福佬人あるいは閩南人）と客家系とに細区分されてきた。ちなみに、2016 年現在の台湾人口は 2,345 万人であるが、各族群の構成比は福建系が 74%、客家系 12%、外省人 12%、原住民族が 2% となっている。

こうした本省人か外省人か、原住民族か漢族か、福建系か客家系か、と

いったように、「族群」間の関係性はさまざまな場面や状況によって異なってくることは想像に難くない。例えば、総統選挙から地方選挙に至るまで、各族群の経済社会的状況に影響を及ぼすさまざまなレベルでの選挙の際には、族群間の対立が表面化した。また、後述するように、かつては本省人と外省人との対立（＜省籍矛盾＞）がきわだっていたが、＜台湾本土＞論が台頭するにともない、「台湾人」とは誰か、「台湾語」とは何かという問題が言論空間の主題となり、福建系の人々は多数派集団であることを以て、自分たちこそが「台湾人」であり、福建（福佬・閩南）語が「台湾語」であると主張するようになった。これに対して他の「族群」、とりわけ、漢族入台以前から台湾を原郷としてきた原住民族は強く反発してきた。このようなさまざまな場面での族群間の対立意識が、これまでの台湾の政治社会的状況を複雑なものにしてきた（王 2014）<sup>1)</sup>。

日本の九州とほぼ同じ面積でしかない台湾が経験してきた複雑な政治社会的状況やそれらにまつわる葛藤の物語については、1990年代以降、日本においても数多く刊行されるようになった台湾に関するさまざまな出版物によって学び、知ることができる（引用・参考文献参照）。それらの多くの著作においては共通して、台湾が負わざるを得なかった＜場所の悲哀＞、あるいは＜ダークネス＞を表象する場所や事物、そしてそれらにまつわる物語が叙述されている点に注意を払いたい。

以上をふまえ本稿では、観光・ツーリズム研究の視点から、近年、「古蹟」あるいは「文化資産」として登録されたり、建築物や施設の改修によりさまざまなかたちで活用されたりしている日本統治期の歴史的建造物や、本省人との疎外関係のなかで外省人が自閉隔離的に居住してきた「眷村」<sup>けんそん</sup>に関心が払われる。筆者の台湾における「ダークネスとツーリズム」という研究テーマには、台湾原住民族および客家というマイノリティ的族群をめぐる諸課題も含まれているが、紙幅の都合上、別稿にてあらためて検討を加えることとする。

さて本論に入る前に、少なからず頁を割くが、次章において上述した〈場所の悲哀〉という言葉の意味について言及するとともに、〈場所の悲哀〉を超克しようとしてきた台湾の政治社会的動向について、先行研究もふまえながら概観しておきたい。

## Ⅱ 〈場所の悲哀〉の超克を志向する台湾

筆者が、〈場所の悲哀〉という重い言葉に初めて接したのは、司馬遼太郎著『台湾紀行 街道をゆく 40』（朝日新聞社、1997年）に収められている司馬と当時の台湾総統であった李登輝との対談録のタイトル「場所の悲哀」によってである。そこで、李登輝が「台湾人に生まれた悲哀」（p.378）を語りたいと述べ、それに対して司馬は「総統と二人で『場所の苦しみ』ということ話を話したいと思っています。」（p.379）と応じている。ここでいう「場所」とは、あらためて述べるまでもなく「台湾」を指している<sup>2)</sup>。

李登輝は周知のように、1923年台湾生まれの本省人（客家系）であり、日本統治期には日本の公教育（旧制中学と高校）を受けた後、京都帝国大学に進学した日本語世代の人である。台湾「光復」後、彼は台湾大学（旧・台北帝国大学）に編入するとともに、米国のコーネル大学にて博士号を取得した農業経済学者として、台湾大学で教育・研究に、そして政策に携わった。本省人出身の日本時代を生きた政治的指導者や知識人などのエリートが、1948年に断行された戒厳令下、蒋介石を総統に戴く中華民国／国民党／外省人政府によって弾圧され、「白色テロ」によって数多くの人々が虐殺されたり投獄されたりしていくなかで、かろうじて李は厄難を避けることができた。そればかりか、蒋介石の死後、その地位を世襲した長男の蔣経国の命によって国民党政府の要職に任用され、1984年には副総統に指名されることとなった。そして蔣経国の死去にともない、李は1988年に総統代行となり、その後、第8期総統（1990～1996年）に信任された（李登輝 1999; 2015）。蔣経

国時代の末期に政治の民主化の気運が高まるなかで、1987年には党外活動（国民党以外の結党や政治運動）を禁ずる「党禁」、報道や言論の自由を認めない「報禁」が解除され、野党・民主進歩党の結党（1986年）、さまざまな活字メディアの澎湃よって、国民党一党独裁専制政治下、長年にわたり閉塞的状况にあった政治・言語空間は急激に変貌をとげることとなった<sup>3)</sup>（若林1992ほか、柳本2000、丸山2000、丸川2000;2010、張2003、酒井2006、張2010;野嶋2016）。

李登輝は1991年に戒厳体制の完全解除（国共内戦の終結）を断行するとともに、国民党保守派の反発を受けながらも、自ら導入した1996年の台湾初の直接選挙により第9期総統（1996～2000年）に選出されるに至ったが、以上に述べてきたように、その来し方は実に数奇なものであったと言える。李が自身の境遇を振り返りながら「台湾人にうまれた悲哀」を吐露し<sup>4)</sup>、司馬がそれに応じて「場所の苦しみ」と言い換えて語り合った台湾という＜場所の悲哀＞とは何か。それについては、以下のような台湾の歴史的経緯をなぞるだけで、台湾人ではないわれわれにとっても十分に察して余りあるものがある。

すなわち、先史の時代から原住民族（オーストロネシア語系）の世界にあった台湾は、1624年にオランダ（東インド会社）によって占拠されて以来、時代を追って外部世界のさまざまな勢力によって支配されてきた。その過程において、各地で原住民族の抵抗にあいながらも、台湾海峡対岸の福建および広東各地からの福建系・客家系の入植によって台湾は開発され、西海岸を中心に漢族社会が急速に拡大した。1662年にオランダの支配を打ち払った明朝再興勢力の鄭成功一族三代による約20年の統治を経て、それまで台湾を「瘴癘の地」、「化外の地」として放置してきた清が、台湾の統治に注力するようになった。しかし、1895年の日清下関条約によって台湾は日本に割譲され、1945年までの50年間、日本の植民地支配下に置かれた。そして、第二次世界大戦（アジア太平洋戦争）の終結にともない、台湾は中華民国政

府によって接収され、さらに1949年には大陸での中国共産党軍との内戦に敗れ、台湾に遷って（渡台して）きた国民党政権（国府）による40年にも及ぶ戒厳令体制のもと、台湾は中華民国／国民党／外省人政府による統治（「再植民地化」）<sup>5)</sup>を受けてきた（戴1988、伊藤1993、殷1996、丸川2000、周2013）。

蔣経国の死後も国民党政権が続いたとはいえ、1979年に高雄市で勃発した急進的「党外」集団への弾圧事件として知られる「美麗島事件」を契機として、国民党による独裁政治に対する批判、自由民主政治の実現をめざす活動は政治家、知識人、地方有力人士などの各層によって展開され、次第に本省人大衆からの支持をも集めるようになった。1987年の戒厳令の解除以降、本省人出身の李登輝の総統への就任、民主進歩党の台頭もあって、台湾は「政治の民主化」の時代へと移行し、国民党政権による厳しい弾圧と言論統制とによって鬱積していた「民怨」（戴1988：203-204）が一気に噴出することとなった。さらに、中国による「一国二制度」という強圧に対する反発、外省人社会において台湾に生まれ育った第2、3世代の時代に移行したことから相俟って、台湾は中国の一部ではなく、大陸中国とは異なる固有の歴史を経験してきた多民族・多言語・多文化社会であるとの認識に立つ「台湾本土」論や、「省籍矛盾」（本省人と外省人との確執）を超えた「新台湾人意識」（台湾アイデンティティ）が、次第に台湾社会に根づくようになった（丸山2000、張2003、若林2008a; 2008b、張2010、周2013、王2014、野嶋2016）。

こうした動きを促したのは、さまざまなポリティカルな場面での李登輝による「台湾本土」論の唱導によるものであったことは想像に難くない。例えば、戒厳令発布のきっかけとなり、「省籍矛盾」を露呈させた「二・二八事件」（1947年）にかかわって、李は1990年に行政院に同事件の真相究明のための専門委員会を設け、その真相を公表した。また、国立台湾博物館裏にあった公園を和平紀念公園に改称し、「二・二八事件」の犠牲者を追悼する紀念碑を建立するとともに、1995年には犠牲者やその遺族に対し、国民党政



府を代表して李総統が公式謝罪したことは、本省人の心のなかで澱となって蓄積されてきた国民党政権に対する憎悪と怨念を和らげる契機となったとも言える（何 2014、李 2015：69-72）。こうした動きにあわせて、1997年には、和平紀念公園内に「二・二八事件」という戦後台湾において最もダークな、社会を分裂させる契機となった出来事を客観的に伝える＜記憶装置＞として「二・二八紀念館」が開設され<sup>6)</sup>、また、「2月28日」が「和平紀念日」に制定されるに至っている。

1996年の初の直接選挙で総統に再任され、2000年まで任期を全うした李登輝退任後の選挙では、台湾の独立を綱領に掲げるとともに、李登輝の唱導と軌を一にするように、＜台湾本土化＞を推進してきた民進党候補の陳水扁（台南出身の客家系を自称）が国民党候補の馬英九に競り勝ち、第10期総統に選出されることとなった（2008年までの2期在任）（丸山 2000）。この台湾における政治的地殻変動は、皮肉にも原住民族、福建系・客家系漢族および外省人それぞれの権利意識や四大族群間の対立意識を顕在化させる契機となったが、その後、省籍や族群、階層さらには世代を超えた＜新台湾人意識＞の表出とその拡がりを促すこととなった（酒井 2006、張 2010、沼崎 2010、王 2014）。すなわち、陳水扁政権は台湾社会が多様な族群から成る多民族・多言語・多文化社会であることをあらためて強調するとともに、台湾人統合のための新しい理念として＜多文化主義＞を打ち出したが（張 2010）、そうした政治姿勢が多様な背景を有す集団・各層の支持を広く集めることにつながった、と解釈されてきた。実際、陳は総統在任中、原住民族との間で「原住民族と台湾政府の新しいパートナーシップ条約」<sup>7)</sup>を締結したり（汪 2006、ティブスング 2014）、本省人の漢族とはいえ福建系に比して劣位に置かれてきた客家系の文化を重視する施策を具体化したりするなど<sup>8)</sup>、マイノリティ族群との和解・融和に努めたのである。

2008年の総統選挙では、陳水扁（退任後、収賄の疑いで起訴、収監された）に替わって、2000年の総統選挙で陳水扁に敗れたものの、国民党候補の

外省人出身（二世）ながら、李登輝から推薦演説の際「君は新台湾人だろ」と言われた馬英九が総統の地位に就くこととなった（～2016年：第12・13代総統）。しかし、「われわれは中国人ではなく、台湾人だ」というく台湾人意識>が高まるなかで、馬は親中国的姿勢をみせたこともあって、2016年の総統選挙では、再び野党民進党の蔡英文に総統の座を譲ることとなった。現政権を担う蔡は、陳水扁政権の基本政策を継承し、台湾は中国の一部ではなく、固有の自由民主国家であることを主張するとともに、過去の歴史を<負の遺産>としてのみとらえたり、歴史認識をめぐる省籍、族群間で対立したりしてきた状況を解消し、新しい台湾像を明確にすることを企図して、陳政権以来の<多文化主義>をふまえた政策を推進する姿勢をより鮮明に打ち出している（張 2010、若林 2008a；2008ab）。

こうして、1980年代半ば以降の政治社会の急激な変動のなかで、<台湾本土>論が次第に定着するとともに、<多文化主義>が台湾社会で広く共有されるようになったことは、台湾の風景、とりわけ<ツーリズムスケープ>にながしかの影響を及ぼしている、と言わざるをえない。例えば、これまでの台湾観光では、中正紀念堂や故宮博物館といった蒋介石政権時代の偉業や中華文明の偉大さを称揚する公式化された「大きな物語」（中華ナショナリズム）が主題となっていたが、近年では、台湾社会を構成する多様な族群それぞれ固有の自由文化や、日本時代を含め台湾の歴史的経験を想起させる断片的な（なかには忘れられてきた）歴史的建築物・遺物・場所が「古蹟」あるいは「文化資産」として評価されることを契機として、そうした「小さな物語」に<観光のまなざし>が向けられるようになりつつある。

以上をふまえ、次章では、近代台湾の歴史を物語る<記憶装置>として保存、修復され、さらにはさまざまな用途に利活用されたりしている日本統治期の建造物や施設、また、「忘れられた」存在になった外省人旧居留地の「眷村」を事例に、現代台湾の<ツーリズムスケープ>のありようについて考察を加えることとする。

### Ⅲ 古蹟・文化資産として登録される日本統治期の歴史的建造物・産業施設

#### 1. 利活用される日本統治期の歴史的建造物・産業施設

日本統治期の歴史的建造物に関する著書は数多い。例えば、片倉佳史による一連の作品『観光コースでない台湾一歩いてみる歴史と風土―』（2005）、『台湾に生きている「日本」』（2009）、『古写真が語る台湾―日本統治時代の50年：1895-1945―』（2015）は、今もなお台湾には日本統治期に建造された数多くの建築物や産業施設が残されており、「明治・大正・昭和の日本」が保存されていることを紹介している。そして、日本の植民地支配が台湾の近代化に貢献した側面を評価すべきであり、それらの遺物が台湾の人々によって手厚く保存されてきたことに思いを馳せるべきであることが論じられている。他方、片倉とは立ち位置を異にするにしても、写真や地図を多用しながら、日本統治期の台湾の風景の復原を試みた、学術的に価値ある著作も刊行されている。例えば、王・二村『図説 台湾都市物語―台北・台中・台南・高雄―』（2010）、陳『日本統治時代の台湾―写真とエピソードで綴る 1895～1945―』（2014）、乃南『ビジュアル年表 台湾―統治五十年―』（2016）などである。

本章では、以上の著作などを参考にしつつ、筆者の旅の経験で得られたいくつかの印象的な古蹟・文化資産に登録された日本統治期の遺物・歴史的建造物・産業施設を紹介してみよう。

#### 1-1 旧三井物産倉庫（台北）

現在（2019年3月上旬）、台北駅周辺では広場の改修、景観整備が進められており、すでに台湾島内の主要地を結ぶ長距離バスターミナルの台北轉運站や、桃園国際空港と約40分で結ぶMRT駅が新設された。また同地内には、清朝時代の台北城北門や1910年代の台湾総督府交通局鉄道部の建物（1910

年竣工、2019年国立鉄道博物館として公開)が古蹟として保存されている。それらに加えて、戦後放置され、道路拡張のために撤去される計画があったレンガ・木造づくりの旧三井物産倉庫(1913年築)も、台北市政府により2014年に歴史的建築物の指定を受け、2018年11月に現在地に移築、復元され(写真1・2)、観光案内所および「記憶倉庫」(Info House)として活用されている<sup>9)</sup>。その建物のレトロさに加え、夜間にはその他の古蹟とともにライトアップされるなどの演出によって、<観光のまなごし>に相應のものとなっており、台湾の歴史的な地層の可視化を促し、歴史的想像力をかきたてる装置としての役割をはたしている。無論、台北駅前を日常的に行き交う台北市民にとっても、これらの建造物が<遠い過去の風景>を追憶、想像させる装置(契機)となっていることはあらためて述べるまでもない。



**写真1 公園整備が進む台北駅前**

写真中央部の建物は改修が進められている日本統治期の職員宿舎を含む鉄道関連施設。上方中央には1910年代の台湾総督府交通局鉄道部のレンガ造り2階建ての建物、その左手に移築され、修復中の旧三井物産倉庫が見える。(2017年12月26日、筆者撮影)



**写真2 旧三井物産倉庫の修復現場**

パネルから同倉庫が台北市政府文化局により「歴史建築」として指定されたことがわかる。(2017年12月25日、筆者撮影)

## 1-2 青田街・日式宿舍群（台北）

台湾師範大学裏手の青田街に日本時代の木造家屋が残存しているが、それらは「日式宿舍群落」として紹介されている（写真3・4）。路傍の掲示版によれば、2001年から行政院文化建設委員会（現・文化部）は全国的に価値ある歴史的建造物を古蹟として登録していく活動を開始したが、青田街保存運動（青田街社区發展協会）の努力が実り、2005年に市政府によってこれらの日本家屋も歴史的建築物として古蹟に登録されるに至った、とある（写真5）。なかにはレストランとしてリノベーションされた家屋もある。台北帝国大学農学部の足立仁教授の居宅として、1931年、現在地の「青田街七巷六號」に建てられた洋和式建築が、それである（写真6）。同レストラン内に掲示されているパネルによれば、足立氏旧居は、歴史的建築として当時の間取りを再現し、保存するだけでなく、足立氏の偉業とその精神（台湾農業発展への貢献、動植物、歴史・言語文化の学術的寄与）を伝承するための場にもなっている、という。



写真3 台北市青田街に残存する日本式家屋

老朽化が進んでいるが、家屋の多くは住まいなどに今なお使用されている。（2017年12月22日、筆者撮影）



写真4 青田街の日本式住居群の由来を伝える路傍の展示パネル

（2017年12月22日、筆者撮影）



写真5 青田街保存運動の意義を伝える展示パネル

レストランに改修された足立教授旧宅「青田七六」にて。(2017年12月25日、筆者撮影)



写真6 レストランに改修された足立教授旧宅

入り口の塀の panels にレストラン名として「青田七六」とあるが、それは当時の住所「青田街七巷六號」に由来する。(2017年12月25日、筆者撮影)

### 1-3 宮原眼科 (台中)

「宮原眼科」は、日本統治期に建設された旧台中駅の近傍、緑川沿い（日本時代の橘町三丁目）に位置する（写真7）。この建造物は、鹿児島知覧出身の宮原武熊氏（1874年生）がドイツでの研修を経て、1927年に開院した、当時の台湾では最新の医療技術を誇る眼科医院に由来する。第二次世界大戦後、同医院は国民党政府の医療部門の役所として利用されていたが、その後、長年にわたり放置されていた。それを台湾で美食事業を展開している「日出」が、レトロとポストモダンが織りなすハイブリッドな装いを感



写真7 台中市宮原眼科の外観

レンガ造りだった医院の建物とポストモダンな様式とを融和させた<インスタ映え>する外観と屋根の「宮原眼科」の看板は目を惹く。(2018年5月27日、筆者撮影)



じさせる斬新な店舗に改造するとともに、「宮原眼科」の名称を掲げ、スイーツの店やレストランとして開業するに至っており、台中市民のみならず観光客からの評判も高い（写真8・9）。



写真8 宮原眼科の店内

屋内の建築様式はレトロを感じさせつつも斬新なデザインがほどこされており、スイーツや洒落た料理が人気を呼んでいる。（2018年5月27日、筆者撮影）



写真9 宮原眼科レストランのコースター

このコースターから当時の宮原眼科の外貌が見てとれる。（2018年5月27日、筆者撮影）

この店舗の特徴は、レストランのある2階の一区画に、宮原氏の略歴や宮原眼科の概要、医院で使用していた器具を展示するなど、狭小ながらも故事的空間（「記憶装置」）が設けられていることだろう（写真10）。展示資料によれば、宮原氏が眼科医としてだけでなく、台中市長や学校長としても活躍した名士であったことがわかる。筆者が同所を訪れた2018年5月27



写真10 宮原武熊氏の偉業を称える店内の展示パネル

（2018年5月27日、筆者撮影）

日、数人の老人たちが展示資料に熱心に見入っている情景からも、誤解を恐れずに言えば、宮原眼科そして宮原武熊氏が台中市民に高く評価されてきたことがうかがわれる。

世界的に、レトロ感のある歴史的建築物を利活用する動きは一大ブームとなっているが、日本時代に建造された旧・宮原眼科医院は、単なるモダンとポストモダンとが融合する、レトロを感じさせ、〈インスタ映え〉するスイーツ店・レストランとしてだけではなく、〈台湾本土化〉の潮流のなかで、台中の歴史的的存在意義を伝える装置として利活用されているものと理解できよう<sup>10)</sup>。

#### 1-4 産業施設をリノベーションした「文化創意園區」

台湾では近年、日本統治期に建設され、老朽化に伴い長年放置されていた産業施設空間を文化・芸術活動などクリエイティブな空間にリノベーションするプロジェクトが展開しており、新たな観光・集客装置にもなろうとしている。

例えば、台北には酒造工場の跡地をアート・イベント空間として再生利用した「華山 1914 文化創意産業園區」がある。同酒造所は 1987 年に工場が他所に移転して以来 1999 年まで放置されていたが、アートやイベントの会場に生まれ変わり、2009 年にはカフェやレストラン、ブティック、ライブハウスなどの集客施設も加わるなど、過去と現在とが交差する空間に変貌をとげている。また、「松山文化創意区」は、1937 年竣工、1998 年閉鎖の煙草工場（「松山煙草工廠」）が 2001 年に市定古蹟に指定されるとともに（一部施設は 2004 年に歴史建築として登録）、老朽化した施設をリノベーションし、展覧会や芸術活動を行う一大文化総合施設となっている（王・二村 2010: 82-83）。

また、「台中文化創意産業園區」は、1919 年創業の「大正清酒株式会社台中工廠」（1922 年に総督府によって接収され「専売局台中支局台中酒廠」となる）の施設を利活用した空間である。1990 年代末まで専売局の酒造工場と



して操業してきたレンガ・鉄筋コンクリート造りの工場や倉庫、そして広大な跡地を利活用したアート空間として再生利用されている（王・二村：104）（写真11）。ちなみに、筆者が2018年5月27日に同所を訪れた際には、コスプレのイベントが開催されており、多くの若者たちでにぎわっていた（写真12）。



写真11 台中文化創意産業園區の屋外のアート作品

台中駅近くの広大な敷地に日本統治期に建設された酒造工場の施設が残されており、それらをリノベーションし、数多くのクリエイティブな活動やイベントが催行されている。屋外の公園には、酒造施設を活用したアート作品も展示されている。（2018年5月25日、筆者撮影）



写真12 台中文化創意産業園區で開催されたコスプレ・イベント

文化・芸術活動の拠点となった同園區では、さまざまなイベントが若者を中心に多くの来場者を集めている。（2018年5月27日、筆者撮影）

## 2. 記憶装置、観光・集客施設の対象となった日本統治期の建造物

台湾における観光・ツーリズムの発展のために「文化資産」としての「古蹟」を活用すべきことを説いた蔡（2010）によれば、台湾において文化資産の保護活動が本格的に始まったのは陳水扁政権下の2000年代からであり、日本統治期由来の建造物の古蹟（文化資産）登録件数は他の時代に比べてきわだって多く、それらが台湾の近代史を語るうえで重要な＜記憶装置＞になっていることを指摘している。

あらためて述べるまでもなく、こうした事実と状況をとらまえて、単純に、

台湾の中央・地方政府や市民が日本による統治期を「肯定的」にとらえようとしていることの証左であると解釈したり、日本社会に流通している「台湾の人々は親日的である」との言説に安易に与したりすべきではなかろう（森2001）。少なくとも、いかなる理由を以てしても植民地支配は、蛮行そのものにはかならないからである。抗日戦争を遂行してきた中華民国・国民党政府による専制政治の時代においては、日本統治期を「日抛時代」と呼び、日本支配を象徴する神社などの建造物は撤去され、碑文などに刻み込まれていた日本語は削り取られ、町名や街路名の「脱日本化」が推し進められ、代わって蒋介石・国民党政権を称賛する政治文化政策がとられてきたのである<sup>11)</sup>。多くの台湾紀行本で、国民党政権の弾圧政治に面従腹背せざるをえなかった日本語世代で日本時代を懐かしむ人々の事例が数多く紹介されているが、植民地支配での経験を否定的にとらえる本省人も存在しており、ましてや中国大陸で日本軍と交戦してきた外省人とその末裔が今なお台湾社会で暮らしていることに留意すべきであろう。

実際、旧三井物産倉庫の所有会社である三井物産の旧社屋が、2000年に市定古蹟として指定され、修復、保存する計画が公表された際には、「日本軍国主義の宣伝になる」との批判の声が上がったことがある<sup>12)</sup>。しかし後年、旧三井物産倉庫の古蹟登録、移転、修復計画では、とくに大きな混乱もなかったようである<sup>13)</sup>。その差異の背景には、20年という年月の間に、正／負を問わず台湾の歴史を<包容>しようとする<台湾人アイデンティティ>の深まりがあったからかも知れない。そういった意味において、「台湾化が進む中で、日本時代の記憶は台湾人のアイデンティティの一部となった」<sup>14)</sup>からだ、との中央研究院歴史研究所の所員の発言は興味深い。

ところで、台湾と同様、日本の植民地支配を経験した韓国でも、日本時代の建築物が歴史館、博物館として存続し、観光スポットにもなっている。しかし、韓国では「反日」の姿勢は強く濃密であり、日本的なるものを想起させるものはことごとく撤去したり、仮に歴史的遺物として残していても、「日

帝強占期」を＜否定的記憶装置＞として利用されていたりする。例えば、朝鮮の経済を支配する目的で1929年に建造された「東洋拓殖株式会社」釜山支店の建物は、釜山近代歴史館に転用されている（2017年3月10日、筆者訪問）。同館には、釜山の近代史の由来を説明する写真・地図などの諸資料が展示されており、教育研究上優れた博物館施設であることは間違いないが、東洋拓殖株式会社は朝鮮侵略と経済的収奪の象徴的存在であっただけに、「日帝強占期」の釜山の歴史については、徹底した批判的語調による説明がなされている点は強調しておかねばならない<sup>15)</sup>。付言するならば、歴代の韓国政権が一貫して「反日」政治を展開してきたこと、とりわけ現在の文在寅政権が「積弊清算」「親日清算」的姿勢を強めていることを想起したい。

これに対して台湾においては、旧三井物産倉庫の修復事業を伝えるパネルにみるように（写真2）、日本時代の遺物の説明の仕方は、「日本統治を古き良き時代」<sup>16)</sup> だったといったように懐旧的であったり、逆に批判的であったりすることなく、日本による植民地支配という歴史的経験を「史実」として伝える様式をとっている。実際、「紅毛城」として観光スポットとなっているオランダ・イギリス時代の淡水に所在する建造物や清代の建築物、そして後述する外省人の居留地であった眷村など、さまざまな他の時代、他の外部勢力による歴史が刻み込まれた建築物と同様に、日本時代の建造物も台湾の古蹟・歴史的建築物・文化的資産として等価的に位置づけようとする姿勢は、韓国の状況とはきわめて異なっている。その理由として考えられうるのは、日本による植民地支配をどのように受け止めるかということに対して、本省人の間でも族群・世代・階層の違い、そしてなによりも各人の経験のありようによって、多声的にならざるをえないからであろう（1994年上映の『多桑』<sup>とうさん</sup> や2014年上映の『KANO 1931 海の向こうの甲子園』といった日本統治時代の台湾の情景を描いた台湾映画をめぐる評価も含めて）。つまるところ、＜台湾本土化＞および＜多文化主義＞を目指した陳水扁民進党政権、そしてその路線を継承する現在の蔡英文政権にとって、特定の族群・階層・世代に沿

う偏った史観で台湾史を叙述することよりも、客観的・実証的「史実」を提示し〈本土としての台湾〉の歴史を綴ることによって、「国民統合」を図ろうとしているものと解釈できるのである。

#### Ⅳ 「眷村」—〈新台湾人〉として定位される外省人たちの生きられた生活空間—

近年、中華民国政府とともに中国から渡台してきた兵士たちやその家族など外省人が暮してきた「眷村」の一部が保存され、本省人とは異なる生活様式を「眷村文化」として懐かしみ、その文化的価値を主張する動きが台湾の〈ツーリズムスケープ〉のなかで存在感を増しつつある。眷村は、本省人にとって中華民国・国民党政府による弾圧政治を想起させるものであり、長年にわたって本省人社会から疎外され、時間の経過にともない、次第に「忘れられた」あるいは「不可視的」な存在となる一方で、経済発展にともなう再開発によって次第に解体されるようになった。しかし近年、「眷村」は新たな観光・集客装置として注目を浴びつつある。

##### 1. 「眷村」とは何か

「眷村」(military village)とは、第二次世界大戦後、大陸中国での国共内戦に敗れ、中華民国政府とともに渡台してきた約60万人もの国民党軍兵士やその家族(眷属)たち外省人の居留地である。政府の上級公務員や高級軍人などは日本人が去った後の家屋などに住むことができたが、下級兵士とその家族は住宅不足のため、台北や基隆、台南、高雄、桃園、新竹などに急ごしらえされたバラックがあてがわれたり、自助的に不良住宅を建てたりせざるをえなかった(王・二村2010:32、益満2016)。その後、中華民国政府による「反攻大陸」という野望は非現実的なものとなり、さらに1971年には中華民国に代わって中華人民共和国が中国を代表する国家として承認された

ため、中華民国政府は国連からの離脱を余儀なくされた。こうした状況変化のなかで国民党軍兵士の存在意義は無きに等しくなり、「なかば強制的に進行されてきた外省人の下級兵士たちは、除隊した瞬間から、社会に置き去りにされた。彼らを取り囲んだのは、もっぱら台湾語で<sup>やかま</sup>姦しく語り合う本省人たちの、警戒と軽蔑が入り混じった眼差しだった。こうして少なからぬ国民党兵士が、光復後の台湾における社会的最下層を形成することとなった。」(四方田 2015 : 71) ののである。

年を追うごとに眷村住民の高齢化が進み、家屋の老朽化は深刻化し、他方で経済発展にともなう再開発が進む中で眷村は撤去され、集合住宅に建て替えられたりするようになった。かつて数十万人の住民が暮した約 900 カ所の眷村は、2015 年時には 99% 減の 9 カ所 (920 戸) にまで減少した (益満 2016)、という。こうして「忘れられた」あるいは「不可視的」存在となった眷村社会の解体が進むなかで、近年、眷村それ自体およびそこで創り出されてきた生活文化 (「眷村文化」) の意義をとらえ直す取り組みがなされるようになった。その具体例として「眷村博物館」の開設があげられよう。

例えば、1970 年代の市政府の建物を利用した「新竹市眷村博物館」がある (写真 13)。新竹は軍略上の要地であったことから、残されていた数多くの旧日本軍の軍営が眷村に転用された。同市には 47 カ所もの空軍・陸軍部隊の眷村が所在し、1988 年の統計によれば、新竹市人口の 19.4% は外省人であった、という<sup>17)</sup>。新竹市眷村博物館は、眷村の歴史を紹介し、その固有の文化を伝える故事館である。まず、眷村誕生の歴史的背景を伝える 1 階部分が 2002 年に開館し、その後、眷村の日常生活を伝えるコーナーの 2 階、特別展示室の 3 階まで増築され、2006 年に完成するに至っている。

ビーフンで有名な新竹は有数の麵食文化の街として知られるが、牛肉麵・拉麵・刀削麵など数多くの麵食店も営業している。それらはいずれも大陸各地から移り住んできた外省人兵士と家族によって眷村で継承されてきたものである。そのことは、博物館内の「緬懷過去時光」「時光隧道」(time tunnel)



写真 13 新竹市眷村博物館  
(2015年3月30日、筆者撮影)



写真 14 新竹市眷村博物館の展示室  
2階の展示室ではかつての眷村の生活文化のありようを学ぶことができる。写真右手のバス停の標識から、大陸各地からやってきた外省人たちの麵文化の多様性をうかがえよう。(2015年3月30日、筆者撮影)

という惹句を掲げた「新竹市眷村味麵條麵會館」と称するコーナーでも知ることができる(写真14)。

同博物館の屋内外には、コミカルな壁画やオブジェなど<インスタ映え>を意識したアート作品も多く展示されており、本省人にとって眷村という「ダーク」なイメージを払しょくするような演出がされている。おそらくは、<省籍矛盾>の時代を生きてきた老世代と、その後の<台湾本土化>時代に生まれ育った若い世代とでは、眷村に対する感覚や意識は異なると言えよう。少なくとも若い世代にとって、眷村は博物館で展示される歴史的存在であり、戦後の台湾が経験してきた<悲哀の歴史>の一断面を知る機会(装置)になっているのかもしれない。ちなみに、上述の台中文化創意園区内の博物館でも、2018年に「時代風華」と題して「眷村文化保存及特色文物展」が開催されていたが、このことは、これまで広く知られることのなかった眷村の生活文化が今日、台湾文化の一つとして<包容>され、その固有の価値に関心が寄せられつつあることを物語っている<sup>18)</sup>。

他方、残存する眷村それ自体を古蹟あるいは歴史的建築として保存する取り組みもあり、『地球の歩き方』(ダイヤモンド社)などの観光ガイドブック



や web サイトを通して、眷村が新たな観光スポットとして台湾内外に知名度を高めるようになったケースもある。例えば、台北の「四四南村」や「寶藏巖」、そして台中の「虹彩村」が好例である。

## 2. ＜観光のまなざし＞が向けられる眷村

### 2-1 四四南村（台北市）

四四南村は、台北市の新市街地である信義区に屹立する超高層ビル「台北 101」（台北国際金融センター：地上 101 階建て 509.2m、2004 年竣工）の展望台から文字通り眼下に見える旧眷村である（写真 15）。同村は、中国の青島から入台してきた「聯勤四十四兵工廠」の兵士たちとその家族が、1948 年、倉庫などに使われていた旧日本軍用地に移入した台北で最初の眷村である（王・二村 2010：83）。1951 年までに南村のほか西村・東村も建設され、三村合計で約 500 戸（四四南村は 50 戸）、2,000～3,000 人規模を有した、という。「四四南村」の名称は「四十四兵工廠」の南に位置したことに由来する（写真 16）。1999 年、台北 101 などの建設をとまなう新都市再開発の予定地となったため、同村の撤去が進められようとしたが、地区住民や文化関係者の努力によって、2003 年に歴史建築（古蹟）に登録され、「信義公民會館」という名称のもと、眷村の歴史と文化（眷村文化）を語り継ぐ場所として保存されている<sup>19)</sup>。



写真 15 台北四四南村

背後の超高層ビルは台北のランドマーク「台北 101」。その近くに位置することもあって、四四南村は中国など外国人観光客の立ち寄り先になっている。（2015 年 3 月 30 日、筆者撮影）

2018 年に改装された博物館には、約 50 年間の生きられた四四南村の歴史と生活文化を伝えるさま



**写真 16 四四南村の歴史を伝えるパネル**  
 博物館のほか、<記憶装置>としての一役を担うかのように、土産物・カフェの店にもこの村の由来を伝える日本語・英語表記のパネルが展示されている。(2015年3月30日、筆者撮影)



**写真 17 四四南村の博物館内部**  
 かつての老朽化した建物の外観を残しつつも、明るく広くリニューアルされた博物館は、週末や祝日には、老世代のみならず子供連れの家族や若者も数多く訪れる。(2019年3月7日、筆者撮影)

ざまな写真・文書資料、そして生活用品などが展示され、当時の日常生活を再現したコーナーも設けられている(写真17)。これらの資料を通して来館者は、この村の艱難辛苦的故事や、住民(兵士とその家族)が中国各地の出身者から成っていたことから「方言不通」であったものの、共生・共住してきたという「小さな物語」や、北方の饅頭・餃子、南方の白米・麺など、中国全土の多様な食文化が凝縮されていたという「眷村文化」の豊かさを知ることができる(写真18)。また、当時の建造物を利活用したカフェテリア、コミュニティホールなども設けられているほか(写真19)、中央広場では週末や祝祭日になるとフリーマーケットなどのイベントが開催されるため、この地を訪れる人は絶えない。



**写真 18 再現された眷村の食文化**  
 (2019年3月7日、筆者撮影)

四四南村という眷村への来訪者



の関心のありよう、あるいは四四南村に馳せる思いはさまざまであろう。かつて眷村で暮らした人々は、この村を訪れることによってノスタルジアを感じたり、自身の＜遠い過去の記憶＞を呼び起したりしているのかもしれない。また、外省人たちとの間で距離を置いて暮らしてきた古い世代の本省人たちにとっては、あらためて眷村世界の一端に触れるとともに、自身の戦後の来し方を思い出す機会につなげているのかもしれない。そして、戦後の混乱を経験したことのない若い世代にとって、四四南村は単にレトロを感じさせる場所の一つとして映っているのかもしれない（写真 20）。

台北 101 というランドマークに隣接する場所にあることから、台湾の人々に混じって、外国人ツーリストの姿を見かけることも多くなっている。例えば、眷村住民たちを送り出した中国からの団体観光客の姿や、旅情報に誘われて眷村という「もう一つの台北」のコンテンツ（「小さな物語」）に惹かれ



写真 19 旧四四工廠の建物を活用した土産物店・カフェ

現在の四四南村を写したハガキ以外に、眷村をイメージさせるモノは見当たらない。洗練されたアート作品や、茶や粟、パイナップルなど台湾特産の農産物の加工品が土産物として販売されている。しかし、すでに廃れてしまった眷村という場を台湾の戦後史の＜記憶装置＞の一つとして読み替え、台湾の新しい生活文化創造の場に転化させようとする意図を感じることができる。（2015年3月30日、筆者撮影）



写真 20 結婚記念の写真を撮影するために四四南村を訪れた若いカップル

（2014年3月29日、筆者撮影）

て訪れる日本などからの個人旅行者である。こうして、四四南村は今や、戦後台北が経験してきた<ダークネスをはらんだ場所>から、<観光のまなざし>が向けられる場所に転化、転位しつつあるのだ。

## 2-2 寶藏巖（台北市）

寶藏巖は、台北市街地の南、台湾大学最寄りの MRT 公館駅より徒歩約 15 分、18 世紀末（清代）創建の觀世音菩薩を祀る寶藏巖寺の背後の小高い丘に位置する（写真 21）。現在は、寺の名前にふさわしく「Treasure Hill」、あるいは「Treasure Hill Artist's Village」（「寶藏巖国際芸術村」）として内外に紹介されている。

高齢の人々が今なお住まう居住区は立ち入り禁止となっているが、迷路のような坂や細い階段沿いの廃屋を活用した工房、カフェなどが点在する空間は、曜日と時間帯の制限はあるが一般公開されている（写真 22）。丘の上からの眺望もよく、若い世代を中心に、訪れる人が増加しつつある、台北における新しい観光スポットとなっている。村内の空き家には、この集落の生きられた歴史、住民の暮らしを VTR や写真パネルなどで伝える施設が設けられており、訪問者にとっては、台湾の歴史を知る学びの場ともなっている（写真 23）。

寶藏巖は日本統治時代、弾薬倉庫などの軍事施設のあったところであり<sup>20)</sup>、当時は、1 人の尼僧と 6 家族が暮す小さな集落であった、という。しかし、1949 年、大陸か

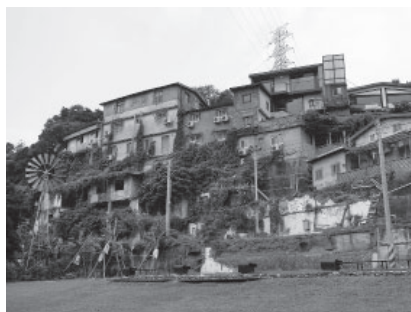


写真 21 「国際芸術村」寶藏巖一丘の上に残る旧眷村—

木造モルタル造りの老朽化した家屋のほかに、新装のアトリエや工房らしき建物を見ることができる。手前の緑地は親水公園であるが、丘の麓にはアート作品に混じって、村の住民の手になる小さな畑も散在する。（2017 年 12 月 25 日、筆者撮影）



写真 22 迷路のような坂と家屋が密集する寶藏巖

この村へは若者がしばしば訪れる。その理由はさまざまであろう。一つにはアートの村であるということ、第二に、市政府によって歴史的建造物に登録された、彼らにとって未知の歴史的断片に対する好奇心から、第三には、<SNS映え>するその非日常的風景に惹かれてのことだろう。(2014年3月25日、筆者撮影)

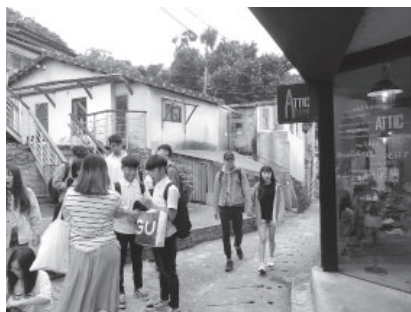


写真 23 アート空間としての寶藏巖を訪れた若者たち

アート・ギャラリー前の小さな広場で憩う若者たち。(2018年3月3日、筆者撮影)

ら台湾に移り住むことを余儀なくされた独身の外省人下級兵士の居留地となり、その後、淡水河と寶藏巖の丘の間の氾濫原に外部から貧困層も移り住むようになった。盛時には200戸を数える一大集落となったが、当時の台湾市民にとって、この集落は「看不見的村落」(invisible village)でしかなかった、という(写真24)。

1980年以降、公有地を不法占拠し、老朽化とスラム化が進む同村のゆくえをめぐって、台北市政府による立ち退き構想が取りざたされるようになった。まず、1980年寶藏巖区域の不良住宅を取り壊して親水緑地公園にする計画が浮上するとともに、1999年には、資金的余裕のない芸術家を支援するために、空き家をアトリエに活用する「貧窮芸術村」(poor artist's village)とする計画が打ち出された。そして、2000年の台風によって38戸の住居が損壊したことをきっかけにして、集落の撤去と高齢化した住民の転居が急務となったが、文化保存運動団体の支援により寶藏巖の立ち退き計画は見直さ

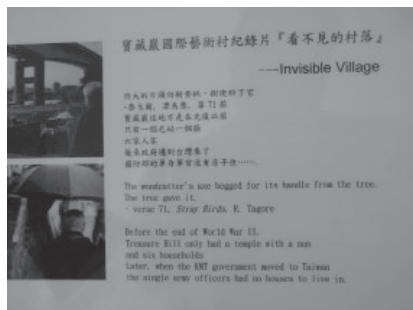


写真 24 寶藏巖の歴史的由来を紹介するミニミュージアムのVTR画面

(2014年3月25日、筆者撮影)



写真 25 彩虹眷村—アートの村として保存された台中の旧眷村—

壁や路面に描かれたカラフルで奇抜なく映える>図柄が、内外から数多くのアーティストを呼び込んでいる。(2018年5月25日、筆者撮影)

れ、2004年には、同集落のユニークな地形的立地と、台北がたどってきた歴史の痕跡を残す集落（歴史的建築）として保存、登録されるに至った。そして、この旧眷村は、住民とアーティストが共存する場として再生され、改修工事後の2010年から「寶藏巖國際藝術村」として一般公開されることになったのである<sup>21)</sup>。

### 2-3 彩虹眷村（台中市）

この村は台中市街地西郊（南屯区）に位置する（写真25）。再開発区域に指定され、周辺の他の眷村が解体されていく中で、この村は、住民の一人、広東省出身の国民党兵士だった黄永阜氏が、家屋の壁面や路面にカラフルな絵を描き始め、マスメディアを通じて広く注目を浴びることとなった。そして、55歳で退役後、黄氏自身がかつて警備員を務めていた近隣の嶺東科技大学の教員や学生などの支援を得て、この村は市政府により2010年に文化公園として保存されることとなった、という<sup>22)</sup>。インターネットで、その色鮮やかで独特のコミカルな画風が話題を呼び、日本など諸外国からのTV番組でも紹介されたことから、現在は、香港や大陸中国などからの外国人観光客

も訪れる＜インスタ映え＞するスポットとして人気を集めている<sup>23)</sup>（写真26）。

同村には黄氏の住居（「爺爺の家」）のほか、かつての狭小な住居を活用した故事館、土産物店、飲食店などがあり（写真27）、児童公園、公衆トイレも付設されている。＜アートの村＞として大衆的な＜観光のまなざし＞が向けられることによって、台湾社会において忘れられた存在であった眷村が成立するに至った歴史的経緯や、眷村に暮らしてきた外省人老兵の＜悲哀の歴史＞を感受する機会の場となっている。

#### 2-4 博望新村（南投県仁愛郷）－「異域」の村－



写真 26 彩虹村－＜インスタ映え＞する写真の撮影に興じる香港からの来村者－

彩虹村の外だけでなく内部も強烈なアートの世界であふれかえっている。（2018年5月25日、筆者撮影）



写真 27 観光スポット彩虹村の内部狭小な村だが、内部の空き家は故事館、土産物店、ギャラリーなどの店舗に活用されており、ミニテーマパークの雰囲気を漂わせている。（2018年5月25日、筆者撮影）

博望新村は、原住民族のセデック族による1930年の抗日武装蜂起の舞台となった霧社から北東、「台湾のスイス」を謳う標高1,700～2,100mの高原に広がる清境農場（羊牧場や高原野菜・果実農場）を抜け、標高3,417mの合歡山に向かう台（湾省道）14号線沿いに位置する開拓村である。村の入り口の標識には「標高2,044m」とある（写真28）。



これまでに紹介した都市部に建設された外省人兵士の居留地とは由来を異にするが、この村も「眷村」の一つと言えよう。すなわち、国共内戦において、雲南省とビルマ（ミャンマー）、タイの国境付近（アヘン栽培で悪名高い「黄金の三角地帯」と重なる地域）を転戦し、蒋介石率いる中華民国政府・国民党軍が台湾に敗走した1949年以降も、前面の敵は中国共産党軍、後方はビルマ軍という「異域」で、10年間「孤軍」奮闘してきた兵士たちの一部が、現地で生活を共にしてきた家族とともに、1960年にタイを経由し台湾に移送された外省人兵士の居留地であるからだ。

村の入り口の標識によれば、この村は1961年に開村した（写真28）。一本の路をはさんで住宅が立ち並ぶ小村でしかないが（写真29）、村の奥には民宿が設けられたり、入り口には「雲南」を看板に掲げた食堂が営業したりしている。一大観光地となった清境農場の先に位置するこの村を訪れる人は少なくはないようである。筆者が2012年8月22日にこの村を訪れた際にも、昼食時とあってか、多くの観光者が食事をしていた（写真30）。

この村がツーリストにとって好まれる観光地となっている理由をあげるならば、一大観光スポットの清境農場の近傍にあること、展望の良さ、霧が



写真28 博望新村－「異域」の村の入り口標識－

(2012年8月22日、筆者撮影)



写真29 霧が流れる博望新村の内部  
一本の路をはさんで長屋が立ち並ぶ。「異域」から移り住んできた人々にとって安住の地となっている。(2012年8月22日、筆者撮影)

立ち込める冷涼な長閑な村であることのほかに、「異域」に由来する村であるからだろう。すでに、『地球の歩き方 台湾 '06～'07』（ダイヤモンド社、2006：203）においても、「歴史の狭間で揺れた人々が暮す村」として紹介されている。

この村が、「異域」の村として広く知られるようになったのは、柏楊著の『異域—中国共産党に挑んだ男たちの物語—』の刊行（日本語版2012年：原著は1961年香港）、そして、1987年の戒厳令の解除後に、同書を原作とする映画『異域 A Home Too Far』（朱延平監督・億陽視聴有限公司：1990年）が上映されたからであろう。観光・ツーリズム研究の観点からすれば、メディア誘発型の観光スポットということになる。

「雲南」の看板を掲げた食堂の店内の壁一面には、この村の由来を紹介する年表や「異域」で転戦した時代の艱難辛苦を伝える写真などが掲示されている（写真30）。そして村の入り口にある公所前には、清境社区發展協会主催の「走過 異域 五十年 since 1949」と題する回顧展が開催されたことを伝える看板も残されている（写真31）。彼の地で孤軍、転戦してきた外省人兵士たちにとって、台湾山中の開拓村も当初は「異域」にほかならなかったであろうが、今や彼らにとって安住の地となっていることは想像に難くない。そして、この村を外部者（ツーリスト）に開放し、「異域」で生き延びてきた元兵士たちの<ダークな物語>を、誇りを以て今に伝えようとする意思を強く感じざるをえない。



写真30 博望新村の「雲南」レストラン  
この村の由来を紹介する壁面の展示物を見ながら、来村者は辛い雲南料理を楽しんでいる。（2012年8月22日、筆者撮影）



**写真 31 「異域」に由来する博望新村**  
「異域」から博望新村に移住してから50周年を記念する展示会が開かれたことを紹介する看板。この村そのものが、国共内戦、その後の「孤軍」、さらに台湾に移住後の悲哀に満ちた歴史の〈記憶装置〉となっている。(2012年8月22日、筆者撮影)



**写真 32 二二八紀念館**

和平紀念公園内に所在する第二次大戦後の台湾において、最もダークな出来事を想起させる〈記憶装置〉と言えよう。屋内外には、「二二八事件」とその後の台湾社会を恐怖に陥れた国民党・外省人政権による虐殺・弾圧の実態を暴き出す諸資料が「実証的」に展示されている。こうした紀念館の展示の姿勢には感銘を受けざるを得ない。しかし、紀念館そのものの設置に外省人から反対の声があがったという。まさに同紀念館は、〈省籍矛盾〉という「せめぎあい」の場でもあったのだ。(2017年12月25日、筆者撮影)

### 3. 文化資産として登録される「眷村」

以上に例示してきた村々は、本省人にとって、40年間にも及ぶ国民党による暗黒の独裁政治、そして元国民党軍外省人兵士たちの居留地という〈ダークネス〉を想起させるものであったであろう。しかし、丸川が「特権層に食い込めなかった大部分の外省人老兵にとっても、戦後（光復後）とは、大陸における従軍の功労がもはや色褪せたものとなり、年を経るごとに台湾人に生活権益を侵食されると感じられる、別の意味での再植民地化の過程ともなっていた。」(丸川 2000: 149) と述べているように、外省人兵士たちは半ば強制的に台湾への行軍を余儀なくされたという悲哀を経験してきた存在であったことに思いを馳せるべきであろう<sup>24)</sup>。このことは、戦後、数年を経て〈異域〉から台湾に移送された国民党軍兵士とその家族たちに対しても





**写真 33** 二二八記念館の屋内展示パネル  
館内最初の展示パネルである。この記念館の前身であるラジオ放送局から、外省人権力によって本省人に対する暴力・惨殺が行われたことが全島に伝えられた。そして、本省人民衆による外来政府に対する抗議行動が各地で広がり、戒厳令、「白色テロ」の時代に入っていくことになったのである。順路に従い、数多くの展示パネルや遺物を見学していくと、暗澹たる気持ちにならざるをえない。(2018年3月3日、筆者撮影)



**写真 34** 二二八記念館の屋外展示パネル  
老人が、「二二八事件」後の推定でも数万人にも及ぶと言われる被害者の顔写真を見入る姿は心を打つ。屋内にも、当時の数多くの犠牲者を追悼する写真パネルやオブジェが展示されている。(2017年12月25日、筆者撮影)

あてはまる。

台湾のポストコロニアル研究の現状と課題について考察した張原銘は、本省人にとって統治者の末端を担った外省人兵士たちも、本省人が多数を占める台湾社会においては少数者であり、周辺の下層の境遇に置かれてきたという意味において、サバルタンの存在である、と説く（張 2003：83）。つまりは、戦後の最初期には支配者の立場にあった外省人兵士は、中華民国政府による「反攻大陸」の望みが非現実的なものとなったため、退役後は「異域」としての台湾において、その存在価値を失うこととなった。しかも＜台湾本土化＞の潮流のなかで少数者の地位に置かれ、次第に彼らの居留地である眷村は「忘れられた」、「不可視的」存在となっていった、というのである。

選挙の季節には、国民党や国民党から分裂し、より強く親中国的姿勢を示す親民党に対して熱狂的な支持行動をとることで、外省人の存在感を顕示す

ることがあったにせよ、第一世代の高齢化、老朽化と都市再開発にともなう眷村の解体、第二、三世代の本省人との通婚によって、眷村は台湾の政治社会においては次第に後景へと退いていったのである（益満 2016）。

しかしその一方で、今日、〈新台湾人意識〉の覚醒、〈多文化主義〉という考え方が浸透するなかで、外省人と彼らの文化が台湾社会のなかで定位され、その存在意義が容認されようとしている。つまるところ、以上に例示した眷村をめぐる社会的状況をふまえれば、観光・ツーリズム研究の視点からみても、台湾社会がかつてのようなく憎悪〉や〈敵対〉の時代から、〈和解〉と〈包容〉の時代へと移行していることがうかがわれるのである（張 2010）。

## V 〈包容の景観〉に生きる〈ダークネスを帯びた記憶装置〉としての〈文化資産〉

筆者は、2019年3月7日、台湾の観光動向について聞き取り調査を行うべく、MRT 国父紀念館駅近くに所在する台湾交通部観光局（台北市大安区忠孝東路四段）を訪れた。その際、面談に応じてくれた日本エリア担当の女性スタッフに対して、この小論でとりあげた台湾の〈負の歴史〉を感じさせる日本統治時代の遺物や、戦後の国民党政権の兵士たちの居住区であった眷村が、なにゆえ文化資産として台湾社会で容認されえているのか、その理由や背景について率直に尋ねてみた。同スタッフからの回答（日本語）の内容を筆者なりにまとめてみると、おおよそ以下のものであったと記憶している。

それは、台湾人は何事にもおおらかであり、寛容だからでしょう。ひとそれぞれに思いはさまざまでしょうが、歴史それ自体は拭い去ることはできないものです。日本時代の遺物であれ眷村であれ、年輩の人々にとっては、古き時代の記憶を肯定的にも否定的にも思い起こさせるでしょう。また、日本

時代の遺物や眷村は、若い世代にとっては自分たちの祖父母・父母が経験してきた台湾の歴史を学ぶきっかけになっているのではないのでしょうか。今を生きる私たちは、歴史を否定できません。そして、歴史を伝えていくことは大切です。ですから、政府は、歴史的物事や建造物を可能な限り保存しているようにしているのです。

「寛容」という言葉づかいにかかわっては、アジア映画・文学評論家の四方田犬彦が自著『台湾の歓び』（2015）で語った内容が印象に残る。四方田によれば、旧日本人街であり、台北一の繁華街であった西門町に、日本人が去ったあと廃墟同然の真言宗の寺が残されていたが、そこに近隣の萬華地区の廟から、航海・漁業の守護神として福建を中心に中国沿海地域で信仰を集める道教の女神・媽祖が移され「天后宮」となった。しかし、地元民は媽祖像の隣に日本人が置き去りにしていった弘法大師像を並置し併せて参拝してきた、というのである。そして、そうした行為は台湾の人々の「生来の寛容さ」によるものであろう、と述べている（四方田 2015:43-44）。そのことは、上述の台湾交通部観光局のスタッフの語りと符合するところがある。言い方を換えれば、宿命としての＜場所や歴史の悲哀＞を「抱きしめよう」としてきた台湾の人々の心性の表れと解釈できるのかもしれない。

この例に限らず、筆者も台湾各地で、＜寛容の景観＞あるいは＜包容の景観＞とも呼べるような場景に接したことがある。例えば、台湾北東部に位置する宜蘭市においてである。宜蘭は清代の県城であったが、日本統治期には行政・経済の中心および軍事的要衝でもあった。今なお、郊外の田野に日本軍の航空基地の痕跡を見ることができるとともに、市街地にも日本統治期の建造物が古蹟として保存されている。例えば、かつての宜蘭庁官舎区がある。そこには、日本とヨーロッパの建築様式を融合させた旧庁官舎が保存されており、1997年に修復された後、「宜蘭設治祈念館」として一般公開されている。また、その周囲には、当時の職員宿舎、監獄などの建造物も残されている。

筆者が2017年12月23日に宜蘭設治祈念館を訪れた際、老人の団体客や家族連れなど数多くの台湾人が、観光資源化された日本式家屋を興味深げに見学している場面に遭遇し、不思議な感情を覚えたものである。それらは、たとえ遺構と化したものとはいえ、日本による台湾支配の権力的象徴であったからにはほかならない(橋谷2004)。また、1919年に建造され、今なお駅舎として利用されている宜蘭駅(古蹟登録)近くの中山公園(旧「宜蘭神社公園」)内には、日本軍の通信基地跡や軍人の死を悼む忠霊塔(1936年建立)が、宜蘭県政府によって歴史的建築物として登録されている。遺構には囲いがされているわけでもなく、傍らに遺物の名称と由来を記した標識が立っただけであったが、市民の憩いの場に似つかわしくない、しかし、戦争を想起させる日本時代の遺構が、植民地支配を受けた台湾の公園という空間に溶け込むように、周囲と一体となって残されている光景は、今なお記憶に強く残っている。旧宜蘭庁官舎区といい中山公園といい、筆者の心象風景に映し出されたのは、<寛容の景観>あるいは<包容の景観>と形容される場景であった。

同様に、本省人にとって支配者集団の末端を担いつつも、次第に台湾社会において周縁的集団に陥った外省人たちが、台湾における族群の一つとして定位され、その固有の歴史的経験や生活文化が今日、台湾社会のなかで「文化資産」として評価されようとしている。その解釈の仕方は難しいが、つまるところ、本省人か外省人か、原住民族か漢族か、福建系か客家系か、といった族群の差異、社会階層や世代の違い、さらには個々人の経験や歴史観・価値観を異にする民衆間の「対立」を煽ることなく、また、過去の歴史を「積弊清算」的にとらえ直すことなく、むしろ宿命として台湾という<場所の悲哀>を「抱きしめ」ようとする台湾の人々や社会の懐の広さや深さを表しているのではないか、と思えるのである。そして、1997年に直接選挙によって総統となった李登輝による台湾民衆への<台湾本土化>に向けた「和解」の呼びかけや、2000年代以降、陳水扁および蔡英文を総統とする民進党

政権が標榜してきた＜多文化主義＞政策が、台湾の風景、とりわけツーリズムスケープをして、＜寛容の景観＞あるいは＜包容の景観＞ならしめているのではないか、と解釈できるのである。

## 付記

この小論をまとめるにあたって、立命館大学文学部の遠藤英樹氏、神田孝治氏を研究代表者とする以下の科研費を活用させていただいた。末尾ながら、両氏に御礼申し上げたい。

遠藤英樹「アジアにおける平和の記憶を紡ぐメディアとしてのダークツーリズム」基盤研究（C）一般（課題番号：17K02142、平成 29～31 年度）、神田孝治「現代社会におけるツーリズム・モビリティの新展開と地域」基盤研究（B）一般（課題番号：17H02251、平成 29～31 年度）

## 注

- 1) さらに、1990 年代から増加の一途をたどる「新移民」（中国人や、ベトナム・インドネシアなど東南アジアの人々との国際結婚による婚姻移民や労働者とその子供たち）を加えるならば台湾は「五大族群」社会となる、との新たな考え方も浮上してきている（沼崎 2010, 横田 2016）。
- 2) ちなみに、コロニアルおよびポストコロニアルな批判的視点から、現代の台湾社会のありようについて論じた文芸評論家の丸山哲史も、台湾という場所性をめぐって、著書『台湾、ポストコロニアルの身体』（2000）において、台湾は＜場所の悲劇＞を経験してきた（pp.46-48）と述べている。そして、＜場所＞を＜身体＞（藤巻注：英語訳すれば“geo-body”となろう）になぞらえ、「台湾という場における近現代史のあり様とは、まさに台湾という一つの「身体」に数々の暴力（＝植民地化）が通過していったプロセスであろう」（p.20）と指摘したうえで、1945 年以降の日本に代わる中華民国政府による統治は「再植民地」的であった（pp. 148-149）と論じている。
- 3) 政治の民主化の過程において、「ポストコロニアルな多民族・多言語的状況がはらむ社会文化的状況のポリティクスやその変動、混乱、転位」があったとの丸川（2000）の指摘は示唆に富む。
- 4) 司馬との対談で、「いままでの台湾の権力を握ってきたのは、全部外来政権でした。…国民党にしても外来政権だよ。台湾人を治めにやってきただけの党だった。これを台湾人の国民党にしなければいけない。かつてわれわれ七十代の人間は夜にろくろく寝

たことがなかった。子孫をそういう目に遭わせたくない。」(司馬 1997: 386) と、当時、現職の総統であるとともに国民党主席でもあった李が、自身の過去を振り返りながら心境を語る場面は胸を打つものがある。その後の著書『台湾の主張』(1999)で、李登輝は自身の来し方を振り返りながら、キリスト者であるがゆえにか、「悲哀の歴史をもつゆえの幸福」と語り、「こうした重複した複雑な過程は歴史からみれば悲哀が故に生じたものかもしれないが、私自身からみれば幸福でもあり得た。」「こうした複雑な歴史は、確かに台湾と台湾人に悲哀をもたらしたが、それとともに台湾独自の豊かな多様性と、逆境にあっても挫けない柔軟性を得たことを無視するわけにはいかない。」(李 1999: 17) と、自身の、そして台湾の歴史を<包容>しようとする場面は印象深い。

- 5) 丸川は、台湾出身の日本語世代の作家である邱永漢(1955年直木賞受賞後に実業家・経済評論家)の作品や、侯孝賢監督の台湾映画『悲情城市』(1989年)などを論評しつつ、「植民地期、あるいはポスト植民地期における暴力(たとえば言語の強制、歴史の隠蔽、エスニック的な対立など)」(丸川 2000: 19)を経験してきた台湾について、次のように説いている。「総じて、戦後(光復後)の台湾の歴史とは、公式的には、日本による植民地統治からの脱植民地化の過程と言うこともできようが、二・二八事件や白色テロの被害者にとっては、大陸から撤退してきた中国国民党による台湾の再植民地化の過程でしかあり得なかった。」(丸川 2000: 149)。
- 6) 二・二八纪念馆とは別に、「白色恐怖紀念園区」(白色恐怖=白色テロ)と称される旧監獄(新北市新店区)や、台湾島東海岸沖合のかつて「監獄島」として知られた緑島に、当時の施設を利用し、戦後台湾における<負の遺産>を伝える装置として、一般に(観光スポットしても)公開されている。
- 7) 例えば、陳水扁は、原住民族が伝統的な個人名の使用を奨励するとともに、身分証上にそれを表記する権利を認めた。さらに、日本統治期以来、台湾原住民族は9族とされてきたが、当該のグループからの要求に応じて、2001年にサオ、2002年にカバラン(平埔族)、2004年にタロコ、2007年にサキザヤ(平埔族)の4族を新たに認定した。後に、2008年にセデック、2014年にカナカナとサアロアも固有の山地原住民族として認定され、現在、台湾原住民族は16族を数えるに至っている。とはいえ、汪(2006)や石垣(2007)、石丸(2016)などが論じているように、原住民族にとって最も核心的要求課題である(彼らの)「土地をめぐる権利回復」は実現できていない。2016年に第14期総統に就任した蔡英文(民進党)が、過去の不平等な原住民族の扱いについて台湾総統として初めて謝罪したものの、原住民族の社会活動家が和平紀念公園のMRT台大医院駅で、台湾政府に対して「返地」運動のデモンストレーションを続けているように(2019年3月初め、筆者確認)、国有地に組み込まれている原住民族の父祖伝来の空間をめぐる問題は、依然として解消されえていない。筆者の友人であり、蔡政権になってから行政院原住民族委員会の副主任委員(政務担当:副大臣



相当)に就任した国立台湾師範大学文学院地理学系副教授の汪明輝(ツォウ族名:ティブスング・エ・バヤヤナ・ベオンシ)氏に招かれ、2016年8月4日と2018年5月27日に彼の執務室に向いた際、原住民族の権利回復状況について話を聞くことができた。原住民族の権利獲得状況は以前に比べて前進していることは確かだが、原住民族の原郷での自治権をめぐる諸課題については、依然として明るい展望が開けてない、とのことであった。

- 8) 原住民族委員会と同様に、行政院の委員会の一つとして、客家の伝統文化の命脈を永らえさせ、台湾を多元民族文化(多文化主義)重視の社会にすることを目的として、客家委員会が2001年6月に設置されている。
- 9) ①フォーカス台湾「日本統治時代から残る三井物産倉庫、移築へ 台北駅周辺の都市計画で／台湾」<http://japan.cna.com.tw/news/asoc/201602260004.aspx>:2016年2月26日(2019年4月21日閲覧)、②日本李登輝友の会「日本時代の三井物産倉庫、移築保存へ」<http://www.ritouki.jp/index.php/info/20160302/>:2016年3月2日(2019年4月21日閲覧)、③travelvision「台湾 台北／日本時代から残る「三井倉庫」、2018年8月に一般公開予定」<http://www.travelvision.jp/news/detail.php?id=81439>:2018年4月13日(2019年4月21日閲覧)、④都商研ニュース「台北三井倉庫、11月1日移築・復原完成－築100年超の大型倉庫」<https://toshoken.com/news/14287>:2018年11月1日(2019年4月21日閲覧)
- 10) 類別として、日本統治時代(1932年)に建造された台南の「林百貨店」をあげておきたい。同建造物は、1980年代から空きビルとなっていたが、1998年、台南市政府により市定古蹟に認定され、2013年の修復後、「林百貨店」として土産物店、カフェなどが営業する人気スポットになっている。
- 11) 例えば、蒋介石の銅像が台湾各地に設置されたり、中華民国国父と崇められる孫文を顕彰する国父紀念館(1972年竣工)や蒋介石の偉業を称える中正紀念堂(1980年竣工)が建設された。また、台湾全域の都市部の街路名には共通して、孫文や蒋介石の名前に由来する「中山路」や「中正路」、中華民国の政治理念を表す「三民主義」に由来する概念用語(民族・民権・民生)、さらに大陸の省名・都市名があてられている。
- 12) 三井物産は、日本統治期に台湾で香料や防虫剤の原料となる樟腦の取引で繁栄した企業であり、その社屋(1920年竣工)は国立台湾博物館前に所在していた。戦後、同建物は地元の銀行として利用されたが、老朽化にともない、その存続の可否やあり方をめぐって、市政府の構想は一部市民から反発を受けた。結局、同社屋は文化資産として登録され、現在、国立台湾博物館の分館としての役割を果たしている。SankeiBiz「台湾、日本統治時代の建造物保存 政府予算での修復も決定」<http://www.sankeibiz.jp/smp/macro/news/180326/mcb1803260500010-s1.htm>:2018年3月26日(2019年8月25日閲覧)
- 13) 前掲9)

- 14) SankeiBiz「台湾、日本統治時代の建造物保存 政府予算での修復も決定」<http://www.sankeibiz.jp/smp/macro/news/180326/mcb1803260500010-s1.htm> 2018年3月26日(2019年8月25日閲覧)。同記事は、蔡政権発足後、「文化部(文化省)は地方の保存活動を支援する「歴史現場再生」プロジェクトを立ち上げ、日本時代のみならず、清朝や戦後の建造物も対象としているが、日本時代のものが多い。」と報じている。
- 15) 台湾国立博物館、シンガポール国立博物館、Surviving the Japanese Occupation War and Its Legacies at the Former Ford Factory (シンガポール)、ペナン華僑抗日戦殉職整備工及び戦没同胞記念碑など、筆者はこれまで日本による植民地支配や軍政統治の歴史をテーマとした数多くの博物館や記念碑を訪れてきたが、いずれもほぼ共通して「実証的史実」を以て過去のダークな出来事を伝えるという展示様式がとられていた。
- 16) 「日本統治期を古き良き時代」だったと主張する「親日家」の台湾人として、台湾独立運動に参加し、国民党政権時代を暗黒の時代だったと批判してきた日本語世代の黄文雄をあげることができよう。黄文雄「台湾では今、古き良き『日本統治時代の建物』が観光地化されている」MAG2NEWS <https://www.mag2.com/p/news/266495/>:2017年9月22日(2019年8月24日閲覧)。ちなみに森宣雄の著作『台湾／日本 連鎖するコロニアリズム』(2001)は、日本の言説空間において影響力を持つようになった台湾人「親日家」が生まれるに至った背景や問題について批判的検討を加えている。森は、台湾人親日家として黄のほか、李登輝、金美齡などの名前もあげている。
- 17) 2015年3月29日訪問時の新竹市眷村博物館の展示資料による。ちなみに1988年時の主要都市人口に占める外省人比率は台北26.7%、基隆23%、桃園21.5%であったという。
- 18) 眷村は閉鎖的な社会であったことから独自の文化を生みだした。現在でも固有の言語用例が使用されるなど、台湾のサブカルチャーの一つとして注目されている。例えば、台湾におけるポストコロニアル文化・文学の現状と課題について考察した張(2003)は、<本土化>の過程における各族群やジェンダー、階級を背景としたポストコロニアルな多声的な文学作品の出現とその意味について言及した際に、眷村に生きた外省人たちの文化的主体性の回復という観点から、「眷村文学」の意義・可能性を示唆している。
- 19) 四西南村に関する概要は、2014年3月25日、2015年3月30日、2017年12月25日、2018年3月3日、2019年3月5日に訪問した際、同村の眷村文物館や土産物店に展示されているパネル資料などから得た知見にもとづいている。
- 20) 寶藏巖寺の入り口には「昭和14年12月建立」と刻まれた小さな石柱が残されている。
- 21) 2014年3月25日寶藏巖を訪問の際、視聴したVTRや村内の展示パネルによる。
- 22) 2018年5月25日訪問時の「故事館」に展示されているパネルによれば、黄氏は、1924年広東省に生まれ、大陸での共産党軍との内戦時に国民党軍に入隊し、中華民国政府とともに渡台してきた。55歳での退役後、台中の工業団地や嶺東科技大学で警備員を



- し、仲間の老兵とともに国防省に土地取得申請をし、自ら建てた住居で暮らしてきた、という。なお、彩虹眷村は Wikipedia でも掲載され、この村の来歴や現状についても詳細に紹介されている。<https://ja.wikipedia.org/wiki/彩虹眷村> (2019年8月20日閲覧)
- 23) Wikipedia (前掲 22) によれば、年間来訪者数は2016年には125万人、2017年には200万人に達している、という。筆者が彩虹眷村を訪れた際にも、香港からの団体ツアー客が大型観光バスで乗り付けていた。
- 24) 国共内戦によって故郷を失い台湾に逃れてきた外省人の流浪の軌跡をたどった分厚いノンフィクション作品として、龍應台 (天野健太郎訳) 『台湾海峡一九四九』(2012)がある。

## 引用・参考文献

- 亜洲奈みづほ編 (2003) 『現代台湾を知るための60章』明石書店。
- 新井一二三 (2019) 『台湾物語—「麗しの島」の過去・現在・未来—』筑摩書房。
- 石垣直 (2007) 「現代台湾の多文化主義と先住権の行方—〈原住民〉による土地をめぐる権利回復運動の事例から—」『日本台湾学会報』9、197-216。
- 石丸雅邦 (2016) 「台湾原住民族の政治的位置づけ」(陳來幸・北波道子・岡野翔太編『交错する台湾認識—見え隠れする「国家」と「人々」—』勉誠社) 70-75。
- 伊藤潔 (1993) 『台湾—四百年の歴史と展望—』岩波書店 (岩波新書)。
- 殷允芃編 (丸山勝訳) (1996) 『台湾の歴史—日台交渉の三百年—』藤原書店。
- 王甫昌 (松葉隼・洪郁如訳) (2014) 『族群—現代台湾のエスニック・イマジネーション—』東方書店。
- 王惠君・二村悟 (後藤治監修) (2010) 『図説 台湾都市物語—台北・台中・台南・高雄—』河出書房新社。
- 汪明輝 (2006) 「台湾原住民族運動の回顧と展望—加えてツォウ族の運動体験について—」『立命館地理学』18、17-28。
- 何義麟 (2014) 『台湾現代史—二・二八事件をめぐる歴史の再記憶—』平凡社。
- 片倉佳史 (2005) 『観光コースでない台湾—歩いてみる歴史と風土—』高文研。
- 片倉佳史 (2009) 『台湾に生きている「日本」』祥伝社。
- 片倉佳史 (2015) 『古写真が語る台湾—日本統治時代の50年：1895-1945—』祥伝社。
- 笠原政治・上野博子編 (1995) 『台湾 (暮らしがわかるアジア読本)』河出書房新社。
- 蔡美芳 (2010) 「観光開発のあり方と地域の持続可能性—台湾におけるメディア誘発型観光の発展についての考察—」『経済論叢』(京都大学) 184 (4)、81-100。
- 酒井亨 (2006) 『台湾—したたかな隣人—』集英社。
- 司馬遼太郎 (1997) 『台湾紀行 街道をゆく40』朝日新聞社。
- 周婉窈 (濱島敦俊監訳、石川豪ほか訳) (2013) 『増補版 図説 台湾の歴史』平凡社。
- 戴国輝 (1988) 『台湾—人間・歴史・心性—』岩波書店 (岩波新書)。

- 戴 国輝編 (1986) 『もっと知りたい台湾』 弘文堂。
- 高橋晋一 (1997) 『台湾—美麗島の人と暮らし再発見— (新生活文化読本)』 三修社。
- 竹雄茂樹 (2008) 「台湾における『少数民族観光』の現状と課題」 PRIME (明治学院大学国際平和研究所) 28、77-87。
- 張 原銘 (2003) 「台湾におけるポストコロニアル研究の現状と課題の一考察—陳芳明によるポストコロニアル研究の展開—」 立命館産業社会論集 39 (3)、69-85。
- 張 茂桂 (田上智宣ほか訳) (2010) 「第4章 台湾における多文化主義政治と運動」 (日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 『ポスト民主化期の台湾政治—陳水扁政権の8年—』 (研究双書)) 123-167. [http://ir.ide.go.jp/?action=repository\\_view\\_main\\_item?detail.....](http://ir.ide.go.jp/?action=repository_view_main_item?detail.....) (2015年3月10日閲覧)
- 陳 柔縉 (2014) (天野健太郎 訳) 『日本統治時代の台湾—写真とエピソードで綴る 1895～1945—』 PHP 研究所。
- ティブスング・エ・バヤヤナ・ベオンシ (汪 明輝) (2014) 「21世紀台湾政党競合下における台湾原住民観光の発展と政治的含意」 『観光学評論』 2 (2)、125-142。
- 沼崎一郎 (2010) 「台湾社会分析の現状と課題—社会階層とエスニシティを中心に—」 (佐藤幸人編 『台湾総合研究Ⅲ 社会の求心力と遠心力』 (調査研究報告書)、アジア経済研究所) 1-14。
- 野嶋 剛 (2016) 『台湾とは何か』 筑摩書房。
- 乃南アサ (2015) 『美麗島紀行』 集英社。
- 乃南アサ (2016) 『ビジュアル年表 台湾—統治五十年—』 講談社。
- 橋谷 弘 (2004) 『帝国日本と植民地都市』 吉川弘文館。
- 藤巻正己 (2014) 「台湾原住民族原郷におけるツーリズムと自然災害—黄昏の仁愛郷廬山温泉をめぐって—」 (吉越昭久編 『災害の地理学』 文理閣) 137-163。
- 柏 楊 (出口一幸訳) (2012) 『異域—中国共産党に挑んだ男たちの物語—』 第三書館。
- 益満雄一郎 (2016) 「国民党陰る『鉄票』2016年台湾総統選」 朝日新聞 2016年1月5日、朝刊 11面 (東京本社)
- 丸川哲史 (2000) 『台湾、ポストコロニアルの身体』 青土社。
- 丸山 勝 (2000) 『陳水扁の時代—台湾・民進党、誕生から政権獲得まで—』 藤原書店。
- 森 宣雄 (2001) 『台湾／日本—連鎖するコロニアリズム—』 インパクト出版会。
- 柳本彦彦 (2000) 『台湾革命—緊迫! 台湾海峡の21世紀—』 集英社。
- 山本春樹ほか編 (2004) 『台湾原住民族の現在』 草風館。
- 横田祥子 (2016) 「東南アジア系台湾人の誕生—五大エスニックグループ時代の台湾人像—」 (陳來幸・北波道子・岡野翔太編 『交錯する台湾認識—見え隠れする「国家」と「人々」—』 勉誠社) 142-153。
- 和田博文・黄翠娥編 (2015) 『<異郷>としての大連・上海・台北』 勉誠社。
- 四方田犬彦 (2015) 『台湾の遊び』 岩波書店。

- 李 登輝 (1999) 『台湾の主張』 PHP 研究所.
- 李 登輝 (2015) 『新・台湾の主張』 PHP 研究所.
- 龍 應台 (天野健太郎訳) (2012) 『台湾海峡一九四九』 白水社.
- 若林正文 (1992) 『台湾—分裂国家と民主化—』 東京大学出版会.
- 若林正文 (1997a) 『蔣経国と李登輝—「大陸国家」からの離陸?— (現代アジアの肖像5)』 岩波書店.
- 若林正文 (1997b) 『台湾の台湾語人・中国語人・日本語人—台湾人の夢と現実—』 朝日新聞社.
- 若林正文 (2001) 『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ—』 筑摩書房.
- 若林正文 (2008a) 『台湾の政治—中華民国台湾化の戦後史—』 東京大学出版会.
- 若林正文 (2008b) 「台湾ナショナリズムの現在」(若林正文編『台湾総合研究Ⅱ—民主化後の政治—』(調査研究報告書)、アジア経済研究所) 67-92.
- 若林正文編 (1998) 『もっと知りたい台湾 (第2版)』 弘文堂.

